発　行　所（郵便番号106－0032）
東京都港区六本木６－11－９
スウェーデンセンタービル５階
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel 03（5412）0503
Fax 03（5412）0549
編集責任者　岡　沢　憲　芙
印刷所　関東図書株式会社
定価400円（年間購読料四千円）
1998年９月25日発行
No.306　第30巻　1・2合併号
（毎月１回25日発行）
昭和44年12月23日第３種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No. 306　Bulletin　Vol. 30　No. 1・2合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Sweden Center Bldg. 5th floor, Roppongi, Minato－ku, Tokyo, Japan.

▶45mのガリバー像が小島に横たわり入場者を歓迎する。

◀富士山を間近に再現された北欧村を背景にしていると不思議な心のタイムスリップを体験している感覚におちいる

目　次

訃報 …… 2
キルナの冬 …… 2
ナチュラル・ステップ …… 3～5
北欧を体験できるガリバー王国 …… 5
大使館の催しより …… 6
10－11月のご案内 …… 7
「21世紀も人間は動物である」 …… 8～10
Faxed From Sweden No. 274 …… 11～12
ジャパンカレンダー …… 13～14
エレン・ケイ『児童の世紀』から100年 …… 15

訃　報

顧問　小野寺百合子氏ご逝去

今年３月31日、研究所の設立当初からメンバーの一員として、夫小野寺誠氏とともにスウェーデン研究活動の推進力となり、研究所の運営に理事として長く尽力され、支えてくださっていた小野寺百合子氏が逝去されました。享年、91才でした。

ここに心よりご冥福をお祈りいたします。

研究所の「スウェーデン社会研究月報」にたくさんの原稿を寄稿された。また第二次世界大戦当時の状況をストックホルム駐在武官の妻として体験された「バルト海のほとりにて」（共同通信社）は、ドイツ語やスウェーデン語などに翻訳され海外に紹介されている。「バルト海のほとりの人々」（新評論）が最後の著書となった。

ほかに児童文学ではトーベ・ヤンソン「ムーミンパパ海へゆく」（講談社）、エレン・ケイ「児童の世紀」（冨山房）や「改訂版　恋愛と結婚」（新評論）など多数の翻訳がある。

キルナの冬

王立スペース物理研究所研究員
山　内　正　敏
Mr. Masatoshi Yamauchi

どうにも暗い。暗いばかりじゃない。暗さがずんずん深くなっている。

こうも毎日十分ずつ日が短くなると、眠気ばかりが先行する。夏の白夜に睡り足りないからますます眠い。熊にでもなって冬眠してしまいそうな心持ちだ。こんなときは仕事をするに限る。間違って休暇なんかとったら本当に冬眠してしまうだろう。

もっとも、これが極夜になってしまうと少し余裕が出てきて

「ああ、なんという美しい朝焼けだろう！」

「馬鹿言っちゃいけない、これは夕焼けだ」

「なにをおっしゃるうさぎさん、赤くハレ上がっているのは君の目玉と南の空。昼焼けと言うべきですね」

「べらもうめ、極夜に『昼』なんて言葉があるもんか、ありゃ夜焼けっちゅうもんだ」

などと詰まらぬ議論に目を覚まさせたりもする。確かに目が覚めるように美しい。

東の空が白んで、これが日本なら「あと30分で日の出」と思うところがどっこい、２時間経ってやっと南東の空に朝焼けが始まる。地上はまだまだ薄暗い。地平の向こうに扇に広がる明かりの筋は刻々右へ右へと座を移し、今か今かと御来光の期待空しく、ゆっくりゆっくり朝―昼―夕焼けを経て、いつしか坤（未申）の空に黄昏時を迎える。かくも変化は鈍いけれども、焼けた雲の色は刻々変わり、「ああ美しい、写真でも撮ろう」と急いでカメラを持って建物の外に出ると、もう色が違う。そういう『刹那』が６時間続く。

極夜に目を覚まさせるものは他にも多い。肌を刺激する寒気に、オーロラ、真珠雲、冬嵐。

言わずと知れたオーロラは、夕焼けの終わって真暗になってから目立ち出す。早ければ４時には出ている。本当は「昼」でも少し出ているそうだが、空が明るすぎて見えない。地平線の下といえども太陽はさすがに偉大だ。もっとも、たいがいのオーロラは真夜中前後を好むから、夕方４時５時に見えるのは珍しい。

真珠雲はオーロラよりも目が覚める。虹色に縁取りした緑の雲、通称「未確認飛行物体」は極夜から立春にかけてほんの４、５回だけキルナの空に姿を現わす。オーロラは北極圏南極圏の大抵で見られても、このUFOだけは世界でもキルナだけの専売特許で、この写真を撮るためにわざわざアラスカから来た人もあるくらいだ。かくも美し

いが、あまりの珍品ゆえに、これを見に来ようなどと云う観光客もテレビ局もない。科学者だけ。

もっとも外面菩薩内面夜叉の典型で、軽やかに飛ぶ雲の中身は大気汚染のなれの果てにて、今売り出し中のオゾンホールと兄弟の間柄とも聞く。いわゆる妖怪変化の類であろうか。いや、まだ、実体は全然わかっていないのだから、やはり未確認飛行物体と云うべきか。今世紀になって初めて出るようになった、と云うところも如何にもUFO臭い。美しさに目を覚まし、恐ろしさに目が覚める。

スカンジナビアの名物・冬の嵐は必ず夜にやってくる。台風のように強い。否、台風よりも強い奴が北海沖にいつも停滞していて、夜になると嵐を起こす。もっとも、風で飛ばすものも何もないから被害も少ない。最大の被害はスキー・コースで、砂漠の如くさらさらした雪を砂丘の如く吹き飛ばして、一晩でコースを雪砂漠に埋めてしまう。ドリフトと云う。それでも強引にスキーをするところがキルナ人ではあるが。

目の覚める事に欠かないけれども、体はやはり冬眠している。24時間の夜で睡眠十分、休養たっぷりの筈なのに、スキーに行っても体が全然動かない。春3月の、体がどんなに疲れていてもスキーがすいすい前に進むのとは大違いだ。ぎらぎらした太陽が懐かしい。

ナチュラル　ステップ
企業と行政向け環境教育(2)

ストックホルム在住　高見　幸子
Mrs. Sachiko Takami

今、スウェーデンの産業界では、環境に配慮しない企業は、“汽車に乗り遅れる”ことになるという意味がある。また、環境対策で社会の先端をいくのは環境団体ではなく、企業だとさえ言われるようになった。エコロジーと経済は密接な関係にあるという新しい見方が産業界で広まり始めたのはこの数年前だった。その間にすっかりその思考方法が浸透し、現在では、企業の間で将来競争に勝ち残るためにはエコロジーを考えた経営方針が必須で、今、環境対策することは、将来への投資なんだという新しい認識ができたのだ。

これは過去5年間で消費者の環境意識がさらに高まり環境にやさしい製品でないと売れないとか値段が20%程度高くても環境にやさしい商品が売れ利益になるという市場ができてきた事と、政府の環境規制が厳しくなってきた事が動機になっているようだ。この社会の変化に積極的に対応した企業の中では大手家電会社のエレクトロラックス社がある。世界で一番早く無フロン（無代替フロン）の冷蔵庫を開発し中国の市場進出競争に有利な立場に立っている。このエレクトロラックス社がエコロジー思考の方針に切り換えるようになったのはナチュラル　ステップの環境教育がキッカケになっているのだ。ナチュラル　ステップの考えはその他ハンバーガーのマクドナルド社やSJ電鉄やイケア家具会社などの環境対策の思考方法の基礎になっている。又、今はスウェーデンの全て288の市町村が「アジェンダ21」の具体的な環境対策案の作成に取り組んでいるが、多くの市町村の職員がナチュラル　ステップの環境教育を受けている。つい最近ストックホルム市がナチュラルステップのコンセプトを導入した。ナチュラル　ステップの環境教育と様々な活動はスウェーデンの企業と行政の意識改革に貢献したといえるだろう。

ナチュラル　ステップは今までの伝統的な環境団体とはいろいろな面で違う。特徴は

- ＊会員制でないので組織自体は大変小さい。
- ＊責任追求やモラル批判型を取らない
- ＊企業のためのエコロジーと経済をつなぐシステム思考方法を紹介した
- ＊多くの研究者、学者のコンセンサスを活動ベースにしている。
- ＊針療法的に社会のキーポイントになる人々に環境教育をし効果的に知識を広める

解説・針療法的

ナチュラル　ステップは大衆対象の草の根的活動をするためではなく、社会の決定者として鍵を握る大企業の経営陣や行政の指導部やそれらの購入部に環境教育をしていった。そして、そこから考え方を広めたが、その活動方法を患者を治療するとき、身体全身をマッサージしたりしないで、局所を針で押さえて痛みを取るという針療法にたとえた。

創設者のカール・ヘンリック・ロベール氏はガンの研究医師だった。ナチュラル　ステップを創設した動機は環境分野が細かい点で口論と目先の利益の差で発展が妨害されていることに対するいら立ちだったそうだ。21回の原稿書き直しの後、彼は50人の学者のコンセンサスに達成し環境教育パンフレットとカセットを作成した。その430万部がスウェーデンの全家庭に送付された。彼はそのために主な企業や組織団体や組合などを説得しスポンサーになってもらった。又、環境問題に関心のある国王に後援者になってもらうこともできた。1989年４月にナチュラル　ステップが設立された。

ロベール氏は環境論争の不一致やマヒ状態は何が基本的な問題で何が末梢の問題なのか見分けられない事が原因だと言う。彼の画期的な働きは学者の間のコンセンサスを作ることに成功したことだ。一人二人の学者の意見では討論が発展しない。彼は基本的なところで数多くの科学者、研究者の意見を一致させコンセンサスドキュメントを作成し、今までの環境保護団体の弱点を大きく変えたわけだ。ロベール氏は近い将来エコロジカルで持続可能な生産製造技術と環境技術が最も重要な市場になると言う。例えば、効率的な省エネの製造方法やリサイクル技術やリサイクルシステムの開発だ。

ナチュラル　ステップの基本理念

人間社会の活動は持続可能な方法で自然循環に合わせていくべきだ。

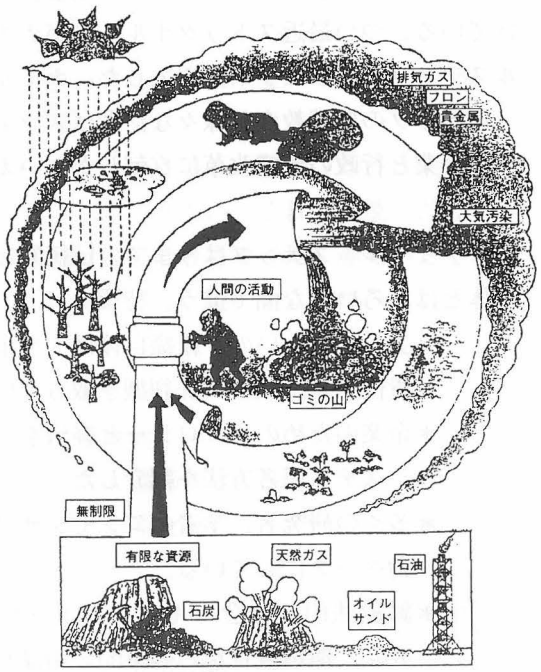
私たちの将来の健康と経済は自然資源をうまく保存する事に成功するか、消耗してしまいゴミと分子ゴミにしてしまうかにかかっている。自然資源を保存するには自然の法則に従うしか方法がない。自然循環に合った社会には４つの条件がある。

１．地殻の物質を掘り出さない

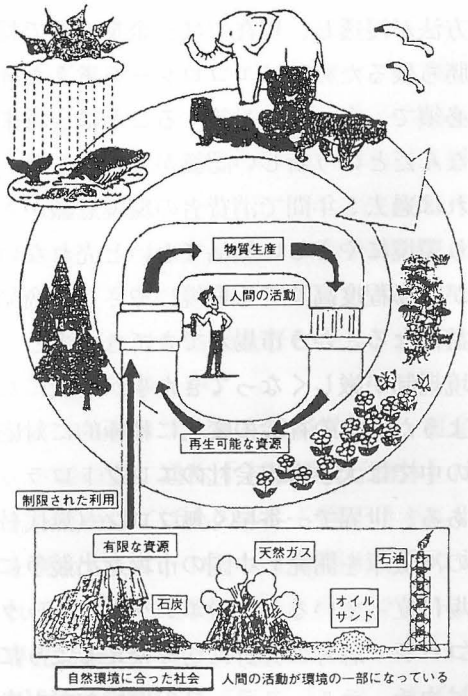
鉱山操業と化石燃料の使用を急減させる。金属はリサイクルする。水銀とかカドミュームのような有害な金属は使用しない。

２．自然に異質な物質を避ける

増えすぎている自然の要素の酸化窒素を減らす。人工の要素で自然で分解できないもの例えばDDTやPCBなどの生産をやめる。



現在の社会　大量消費・使い捨ての人間活動



自然環境に合った社会　人間の活動が環境の一部になっている

3．動植物を保存する

森林の乱伐採をやめ、生物の種を絶やさない。農地に道路や大都市建設をしない。再生産される以上の漁獲をしないなど。

4．浪費をやめる

裕福な工業国が資源を節約したライフスタイルに変える

企業にとっては製造と企業活動をこの４つの条件に合わせることが経営方針をエコロジカルに換えるコンパスとなっている。

日本はやる気になれば環境技術の開発で世界をリードできると思う。でも、それには日本のトップの政治家、行政、企業がしっかり日本の社会を自然循環に合った社会、持続可能な社会にするんだと決心する必要がある。日本はまだかっての経済成長の夢を追いかけているように思う。でも、天然資源は限られており、世界の人口は増える一方の状態で今までの直線的な資源利用の社会は持続が不可能なのだ。壁にぶつかる前に方向転換をしなければならない。そのためにはナチュラルステップが言うようなエコロジー思考が必要なのだ。スウェーデンのような小さい国は小回りがきく車のようなもの。その国が方向転換をしようと動いている。日本は大型のトラックのようなもの。方向転換をするにはもっと早くからの準備と計画が必要だ。ナチュラル　ステップのような環境教育機関も日本に必須だと思う。

北欧を体験できる「ガリバー王国」

1997年の７月26日富士山麓にオープンした「ガリバー王国」。

その一画には北欧の美しい街を再現した「北欧村」があると聞き訪れた。

一歩足をふみ入れるとまるで北欧（とくにスウェーデン）に来たのかと錯覚してしまう程の雰囲気がある。男女ともにスタッフもスウェーデンやサーメの民族衣装を身につけている。

広場の周りにはレストランやギフトショップが立ち並んでいて、その名称も北欧にちなんでいるのが面白い。直接サンタの元へ手紙を届けてくれるサンタショップの「ユールトムテン」、スウェーデン人が好きなお菓子ゴーディスが豊富な「ルンド」、そして北欧の工芸品から家庭用品までを扱う「オーロラ」などがあり本格的な品揃えである。更にうれしいことに全て手頃な価格で販売されている。

標高１、200メートルに位置し、パーク内を見ると至るところに岩があるのに気づくがそれらはすべて元からあったものをそのままの状態で、いわばオブジェの一種の役割をしている。自然と触れ合うだけでも楽しい空間である。

97年はアイスランドフェアーとして「氷と火の国・芸術二人展」と題した、写真展が開かれ98年は年間を通じスウェーデンフェアーが開催されている。「ガリバー王国」のコンセプトは“アミューズメントエコロジーパーク”だそうで、スウェーデンでも現在は環境問題に力を入れている事もありそれ故に、ガリバー王国でもその理念に基づいた環境作りを期待している。わざわざ飛行機に乗らなくても北欧を体験できる場所だが、交通の手段が限られるのが残念だ。しかし訪れてみる価値は十分にある。

［営業時間］平　日　９：３０～１７：００
土日祝　９：３０～１８：００

☆営業時間の変更をする場合がありますので確認をして下さい。

［インフォメーションセンター］
☎　０５５５－８９－２０００

河口湖駅下車路線バスにて県境駅まで約40分
（県境駅からガリバー送迎バス有り）
土日祝のみで片道１，２３０円
本数も少ないので時間には十分気をつけて下さい。

文；松元　さぎり
SAGIRI　MATSUMOTO
写真；中島　千絵
CHIE　NAKAJIMA

大使館の催しより

アッペルグレン展を見て（1997.10.14）

H.アオ

異色の画家である。そして最も自然、山野の花や緑を愛した画家である。
特に、私の興味を引いたのは木製の額である。画家の語る処によると、取り壊された古い木造の家の板を貰って来て、それを再利用して、木目を生かした額に作り変えているようである。
使用ずみの古材を再利用するなどということはスウェーデン人ならではの発想である。
そして、しかも、その額の中に絵のバックとして年月を経たような感じの板状のものが、あたかも塀の一部であるかのように、写真で撮ったごとく細密描法で描かれている。
勿論、オブジェとして描かれている多くのものは花であるが、その花類も克明な影を添えた細密描写であることは言うまでもないことである。
ルオーの絵が大部分額縁にまではみ出しておりそのはみ出た部分も含めて、即ち縁の額までを含めて絵が構成されているということであるが、この画家の絵も、オブジェの影が額縁にまで及んでさりげなく描かれている。
そして観者に「おやっ」と思う一種の驚きと好奇心を起こさせる。
そのキャンバスからの越境した部分が額縁にさりげない暗色の影をして描かれている処に画家の「奇」を衒わないおくゆかしさ、自然を心から熱愛する画家のたくまざる純粋さが出ていて私には極めて好感の持てる作品に思われた。
少々難を言わしてもらうとバックの板目まで、あまりに忠実に細密に描写されているため、モチーフの描写と力が均衡し過ぎて、モチーフのアピールする力が分散され弱められている点である。
換言すれば、画面に描かれたものの総てに力が均等に入り過ぎているためオブジェの持つ素晴しい色彩の美の効果がかなりマイナスになってしまっているとも言える。
総じて、さわやかな後味の残る作品展であったと言える。
なお、此処に掲載する写真及び画家の略歴は大使館から配布されたものをアレンジして転載したものである。

詩

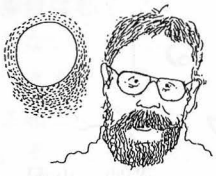
片眼の画家の描く花
スウェーデンの、片眼の画家の描く花
野の花、赤く、白く、紫に、
緑の葉っぱを従えて
廃屋の板塀を再利用した
お手製の額の中に納まっている
額の中には
キャンバスに木の目の模様まで克明に描かれた
立ち並ぶ板をバックに
咲きほこった美しい花を、逆さにつるし
黒い影を添えて描かれている
その黒い影はしばしば
力あまって
額縁の上まで、こぼれ出てる
写真を越えたリアリズム
描いた画家は、独学の元新聞記者であったとか
交通事故で、片眼が見えなくなって画家に転職したとか
画家は毛深い、ズングリ、ムックリ
この美しい、花の絵からは
イメージしがたい
素朴な
飾らぬ
自然を愛する人である

（短歌一首）
片眼なる北欧の画家描く花手造りの額に命かがやく
（「原型」より転載）

BERTIL　APPELGREN

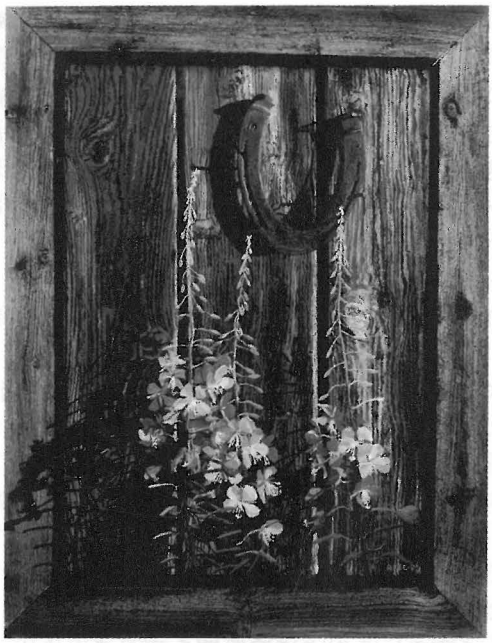
アッペルグレン氏は、1935年にストックホルムに生まれました。少年時代に絵画とデッサンを学びましたが、その後は独学で美術を学んでいます。長年、新聞漫画家、そしてジャーナリストとしての仕事を並行して続けていました。アッペルグレン氏の描く漫画は、コミカルであったり、シリアスであったりと様々で、数多く海外の新聞にも掲載されています。また、インターネットのホームページ作成、著作、挿絵等も手掛けています。

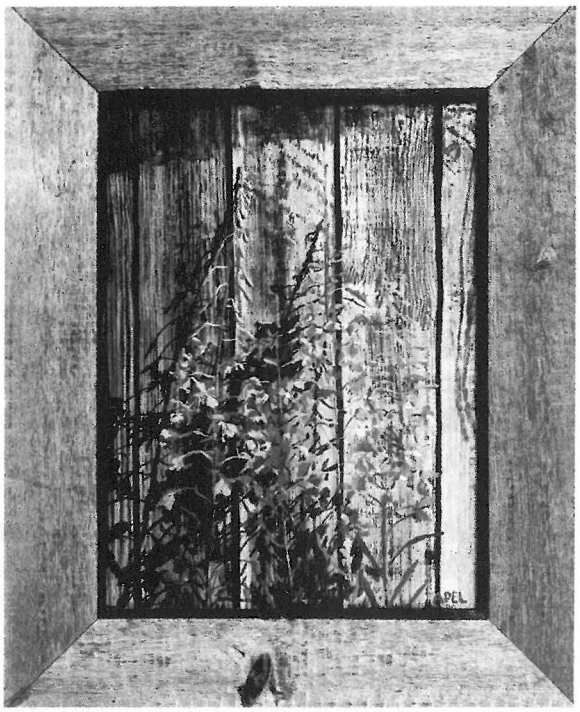
アッペルグレン氏は、1975年に交通事故で重傷を負い右目の視力を失い、それが熱心な絵画創作活動を始めるきっかけとなりました。氏は、神から授かった視覚という能力の素晴らしさに気付き、残されたもう一方の目で、より多くの時間と愛情を注ぎ込みながら絵を描くようになったのです。



APEL

BERTIL APPELGREN





《10―11月のご案内》

1．第２弾「ダーラナ・緑の風につつまれて」中嶋千繪・松元さぎり写真展

日　時：10月13日（火）―31日（土）13：00―19：00（日曜・祭日は休み）

好評につき、写真展を引き続き開催します。展示写真が前回とは異なり新しくなります。
会場にて展示写真の即売及び絵はがき（１枚￥200）の予約販売を承ります。
展示写真の販売価格は4,000円（200×150ｍｍ）からです。

2．ＣＤ・書籍の割引販売

日　時：10月15日（木）―17日（土）13：00―19：00
共　催：（有）ソルベーグ

ＣＤお買い上げの方にサンプルＣＤをプレゼント。書籍は、最近のスウェーデン関係の出版物、写真集、スウェーデン語の辞書・テキストなどを割引価格で販売、また中古ペーパーバックの在庫処分セールも致します。

１．２．会場：スウェーデンセンター５階　社団法人スウェーデン社会研究所

3. 幼児保育研究会

日　時：11月20日（金）18：30―20：30
講　師：荒井　洌（あらい　きよし）氏（白鴎大学教授）
テーマ：「北欧の幼児保育・日本との比較で見る」

この夏北欧に視察に行かれた荒井先生を講師にお迎えし、スウェーデンを中心に最近の幼児保育の事情をスライドと共に、日本との比較をしていただきます。

定　員：60名　参加費：会員無料／一般　1,000円
会　場：トーモク会議室（丸ノ内三井ビル４階）
東京駅南口から徒歩３分、または千代田線二重橋前４番出口より１分
申込・連絡先：社団法人　スウェーデン社会研究所
ＴＥＬ：03―5412,0503　ＦＡＸ：03―5412―0549

・視察旅行ご案内　　北欧介護福祉研修プログラム　　1999年３月実施
テーマ：「福祉先進国スウェーデンにおける高齢者ケアの歴史と現状から介護福祉の精神･知識･技術を学ぶ」
連絡先：ＪＴＢ医療・福祉プロジェクトデスク　☎：03―5512―0510

・次回予告　12月５日（土）午後より講演会・ルシア祭の予定

「21世紀も人間は動物である」

～スカンジナビア・エコロジー・クラブ～

講師　小沢　徳太郎
Mr. Tokutaro Ozawa

小沢徳太郎氏は、22年に亘って大使館に勤務し、環境問題を研究されてきた。この度表記のタイトルで新評論社から出版され、今回のエコロジー・クラブではその内容についてお話しいただいた。以下は研究会のテープに基づいて編集したものである。

今日は出来るだけ皆さんの質問を受けて、討議していく会にしたいと思います。先ず、日本には、間違ったことを声高に主張する人が多い、ということを言いたいと思います。私の今回出した本は「21世紀も人間は動物である」という、極めて単純な分かりやすい題名です。おそらく21世紀という社会は、当たり前のことが当たり前であるが故に、今のままに進むと、とんでもないことになってしまうのではないかと思います。

話を始める前に皆さんのお手元にある次の質問をご覧下さい。これにマルかバツを記入していただきたい。なぜこんなことをするかというと、ここにいる皆さんと、同じ土俵に立って環境問題を考えたいからなのです。他人がどう思おうと関係がないので、自分の意思を表示していただきたいと思います。

●皆さんはどう考えますか？

その1　21世紀に私たち人間は動物の次元を逃れることができる。

その2　21世紀に私たち一般人が宇宙空間で自由に生活できる可能性はかなりある。

その3　21世紀も私たちは地球上の限られた資源に依存し、地球上の環境に生存をゆだねざるをえない。

その4　人間第一主義はいけない。『環境』と『開発』は両立しえないものである。

その5　現在の環境は20年前の状況に比べて全体としてかなり改善されている。

その6　わが国の環境対策は世界の最高水準にあり、わが国の省エネ対策も世界の最高水準にあるので、わが国は環境・エネルギー分野で「国際貢献」できる。

その7　わが国が世界に誇る産業・経済システムの特徴は優れた技術力にある。

その8　工業化社会の経済を実際に支えているものは第一義的には『市場メカニズム』、『市場原理』、『競争原理』などである。

その9　私たちにとって「健康」よりも「更なる経済成長」のほうが大切である。

その10　2050年の社会は現在の社会システムや産業経済システムを拡大・延長した方向にある。

その11　まったくあり得ないことだが、仮に原発の安全性が100%保証され、核廃棄物も100%安全に処分できるなら、今後50年間のわが国のエネルギー体系を現在よりも更に原発に依存する方向でよい。

第一の問をマルと思う人は一名ですね。すると他の方は逃れられないという考えですね。第二の問はどうでしょう。マルは二人ですか。三番目、これは全員マルですか。第四、マルは五名です。五番目、マルだと思う人は二人。次は六番目、これは五人です。七番、これは十名ですね。八番め、十一名。九番は全員バツですね。十番、マルは三人ですね。十一番、最後の質問ですが、これで良いと思う人、これは十名。

私は勝手にこのような質問を作りましたが、私自身がどう考えるかを申し上げたいと思います。私は皆さんと相当意見が違うように思います。私が書いた本も皆さんの考えとだいぶ違うだろうと思います。それは私に取って大変嬉しいことなので、意見の違いについては、ぜひとも議論をしたいと思います。私の解答を申し上げますと、私がマルをつけたのは、この中で一つだけ、三番だけです。残りはみな、バツだと思います。皆さんの考えは私と相当違うわけですから、多くの質問がでると思います。私の考えを挑戦的に申し上げると、皆さんの解答の中には、皆さんが自分で考えたと言うよりも、既に誰かが言ったとか、文献とか新聞によって、頭の中に取り込まれてしまった知識が、あるのではないかと思います。一番については、一人だけマルの人がいましたが、私の本のタイトルになっているように、私の素人の直感としては、逃れられないと思います。二番については、私がこの質問をした理由は、この点について我々がある程度の合意を持っていないと、環境問題は混乱して、議論が滅茶苦茶になると思うからです。これも直感ですが、困難だと思います。環境問題で重要なのは、例えば一番がなぜ重要かというと、我々は水が無ければ生きては行けない。空気がなければだめだ。食物が無ければだめだ。放射線の中では生きてはいけないというような、基本的なことがあるわけです。このような点を考えると一番、二番というのはバツではないかと思

います。三番目は私もマルです。四番め、人間第一主義はいけない、これは私の本の中では、第一主義であるべきだと主張しています。なぜなら環境問題を引き起こしたのは人間だと私は思っているからです。そしてその影響を受けるのも人間だと思っているからです。それ故に人間を忘れた環境問題は基本的に存在しないというのが私の主張であって、どうして人間がこのような間違った状況になってしまったかというと、近代の科学技術が環境問題を引き起こしている原因だと思います。しかし私たち人間は科学技術の発達とともに、生態学の知識を増やしてこなかった。これがために問題が起こったのだと思います。次の質問、現在の環境は20年前に比べて、かなり改善されているという論点については、皆さんのお考えの通り、決していい状況ではないと思います。新聞記事を見ているだけでも判ります。日本では10月から12月ころになると、環境庁が色々な調査をやります。その調査を見ると良くなっているのは、ほんの少ししかない。ほとんどの物は過去最悪で、良くなっているのは窒素酸化物と一酸化炭素の大気中の濃度が低下していること位です。それ以外の項目は皆悪くなっている。国際的には、UNEPSで出した本の中に、20年前に比較して、現在の状況は史上最悪であると言われています。次の、わが国の環境対策については半数位の人がマルをつけていますが、これも私はバツだと思います。温度と湿度がある程度一定していて、光と空気と水が確保され、動植物しか食べられない、というのが人間や生物の生きる最低限の条件であると思います。この条件は今も昔もちっとも変わりがない。しかし周りの状況が科学技術の発達によってすっかり変わってしまったわけです。それ故に人間の身体に大変なストレスがかかっているわけです。加藤三郎さんは日本の初代の環境庁の地球環境部長だった人ですが、彼が言うには、日本は環境分野で国際的に貢献していると言えるか、という件について、現役時代には、貢献していると主張し続けてきたが、正直に言って日本にそれだけの実力はないよ、と今はいっています。途上国へ持っていって通用するような技術はないと。私は良くぞ加藤さんが本音を吐いてくれたなと思います。加藤さんはもうひとつ、日本は公害対策先進国と言われてきたし、彼自身も現役の時はそう言ってきた。しかし引退後は、決して先進国とは思わない、と言っています。このような意味で6番もバツだと思います。次の項目、わが国が世界に誇る産業・経済システムの特徴は、優れた技術力にある、という点も私はノーだと思います。日本の新聞や識者の意見は、みなそうだと言っているが、私は違うと思います。問題は、技術のベースになっているエネルギーが、化石燃料を基礎にしているのだから、化石燃料がなくなると、現在の技術は役に立たなくなると思います。次の競争原理ですが、私は洋の東西を問わず、経済を支えているのはエネルギーだと思います。エネルギーを大量に使って、その結果発生するのが、環境汚染であります。従って、エネルギーが大量に確保されているという前提のもとに、市場原理とか、競争原理が出てくるのだと思います。9番は皆さんと一致しています。10番は明らかにバツだと思います。持続可能な社会とか、21世紀に私たちの目指す社会は、今の社会の延長線上にはありえないというのが、私の考えです。11番、これはかなり多くの方がマルをつけておりますが、私はノーだと思います。もし10番がかなり高い確度でマルであるならば、11番もマルだと思います。皆さんの考えには矛盾があるように思います。今の社会は工業製品の大量生産、大量廃棄に支えられていますが、この社会は原子力と石炭火力による、電力によって支えられています。従って現在の社会を支えるには、これは最適のエネルギーだと思います。しかし将来が現在の延長線上にないとすれば、今最適なものは、最も不適なものになる可能性があります。この問題について、簡単な資料をお見せしたいと思います。通産省が出している、あとエネルギーがどれだけ残っているかという、資料があります。これによれば現在のペースでエネルギーを使っていくと、石油はあと45年くらい、天然ガスは60年くらいしかありません。石炭は200年くらい。原子力も今使っている軽水炉ですと、あと70年くらいしかないのです。今我々が使っている燃料は50年くらいしか保たないだろうと思います。

今わが国でなされている原発の論争は、70%が安全性の問題、廃棄物処分が20%くらいだと思います。将来の社会を念頭に置いた議論は、わが国は何等なされていません。だから、日本では安全性と廃棄物の問題さえクリアーされれば、良いのだということになってしまうのです。皆さんの解答も、そのようになっています。日本の政策は、経済の持続的拡大が暗黙の了解になっています。日本は第二次世界大戦で負けてゼロになりました。その時に作ったビジョンが、経済の持続的な発展だったのだろうと思います。つまり、日本のエネルギー政策は極論を言えば、50年前に作ったビジョンを実現するための、エネルギー体系であるということです。一方、スウェーデンの政策は、スウェーデンが作った福祉社会に、貢献しなければならないということです。それから産業を継続的に発展させるということ、この意味は現存する産業を、そのまま大きくするということではありません。当然、方向を変えて継続するということです。天然資源の責任ある管理、及び環境への配慮というのが、スウェーデンのエネルギー政策の中心です。日本の場合には今のシステムを更に拡大

するわけですから、石炭火力、天然ガスの使用を増加させるという、方向へ向かいます。長期的には、原子力に依存するのです。スウェーデンは、当面の目標としては電力を有効に利用して、出来るだけ省エネルギー、省電力をすることです。そして将来は、再生可能なエネルギー体系へ持っていくということです。当然、日本の場合は、原子力へ予算が多く配分され、スウェーデンでは、原子力へは殆ど予算は回りません。2050年の世界では、世界の人口は現在の二倍になり、経済規模は二倍か三倍になると、予想されています。従って、エネルギーの消費も、現在の二倍か三倍になる。一方環境は劣化する。皆さんが指摘するように、今の環境は20年前よりも悪くなっている、それが更に悪化するということです。しかし、私はこのようなことは有り得ないだろうと思います。何故ならば、人間は動物の次元を捨てられない。人間は数百年前にこの世に出てきた訳ですが、その数百年前から今に至るまで、身体の機能は殆ど変わっていません。だとすれば、あと百年間も殆ど変わらないでしょう。そうすると、今よりも環境が悪くなれば、我々は耐えられなくなるでしょう。それが環境問題の本質だと思います。

このような議論は、日本では全くなされておりません。日本でされている議論は、実に他愛ないものです。私たちが今考えなければならないことは、自然の大きさに比べて、人間の大きさが大きくなりすぎたということです。地球は誕生して今に至るまで、殆ど変わっていない。その中で、人間の活動がどんどん大きくなっています。このまま人間の活動が増加していくと、明らかに自然の容量をオーバーするのは、素人の目にも判ることです。私たちが、安全に、心配なく生活できる条件が整うためには、活動のペースを落とさなければならない。環境問題は、人間社会と自然の社会との間で起きているのです。人間の社会では、自由だとか、平等とか、博愛といった理念があります。人間が快適に生きていくために、社会的に、経済的に、色々な要請があります。しかしそれを満たしつつ、生態系を維持しなければ、人間社会は崩壊してしまうのです。しかし、日本における環境問題の理解は、他の社会問題と同列化して捉えています。他の社会問題の一つに過ぎないという認識がある。これはとんでもない間違いだと思います。環境問題は日本の人間社会を支えている自然に問題があり、その原因は人間であり、被害をうけるのも人間であります。どうしてこのような認識になったのでしょうか。私は基本的には、法体系の問題だと思います。公害対策基本法という法律が、1967年に出来ました。その法律の中で、典型公害というのを定義しました。しかしこの法律では、今起こっている環境問題には、対応出来ないというので、1993年に、環境基本法という新しい法律を作りました。古い法律の時には、典型公害と、自然保護のふたつしか、議論していませんでした。新しい法律では、これらに加えて、地球環境問題などという、新しい言葉を作った訳です。この言葉は、完全に日本の社会に定着してしまいましたが、スウェーデンの文献を見ていると、こんな言葉は出てきません。

石さんという朝日新聞の日本で一番環境に詳しいジャーナリストがいます。彼が言うには、地球環境問題などという、大風呂敷を広げている国は日本だけだ、と言っていますが、私も同感です。９項目の問題を指摘していますが、私は前の法律をもじって、典型地球環境問題と呼んでいます。これらの問題は、我々の目に見えるようになった現象面にすぎないと言うことです。これらの問題は、しかも同時進行しています。しかし、皆さんが環境問題の講演会に出席しても、大抵は、専門家が出てきて、一つの部門しか話しません。温暖化の専門家は温暖化の話だけです。フロンの人はフロンだけです。ですから、このような取り組みは間違っていると私は思います。重要なことは、環境問題の最も大切な部分が完全に抜けていることです。私の認識している範囲では、今まで勉強してきたのは、自然科学的発想に基づくものだと思います。だから、それぞれの現象について、その原因を抑えようということになる。これを社会的な発想でいくと、どうなるのでしょうか。同じことが、全く違った形で見えてきます。原因はなにか。経済成長による大量生産、大量消費、大量廃棄、あるいは景気の回復といったものが原因になってきます。国や、自治体や、企業の予算が拡大して、負債が多くなる。負債を返すために、更に経済活動を拡大するとか、都市が大きくなって、巨大な構造物が方々にできるとか、だからこそ、我々は社会学的な見地からすれば、価値観、ライフスタイルを、変えなければならないのであります。ですから、技術的な対応だけでは、何も解決することは出来ないと、いうことになるわけです。スウェーデンでは、ずーっと昔から社会的な対応、制度的な対応を行って来ています。

私は21世紀のわが国は大丈夫なのだろうかと、不安に思います。何故かといいますと、現在の日本の法体系は、治療的な視点で作られている。問題が起きてから、あわてて法律を作る。何かが起きないと、法律を作らないというのが、問題です。第二に、議会制民主主義で官僚が主導権を取り、政治家が極めて弱いというのは致命的です。それに、省益を最優先する縦割行政。これらの状況から生み出された、現象追認型の諸政策。総合的な結果として、日本のような社会システムに育まれた、企業や我々の環境に対する認識の薄さ。こういうことで大丈夫なのだろうかというのが、私の疑問であります。今、日本は閉塞感に陥っている

と、言われています。私はその原因はふたつあると思います。ひとつは、殆どの全ての分野における倫理感の喪失であります。我々人間の正常な社会は、色々な利害の異なる人々で成り立っている。みんなが同じことを考えている社会は、異常な社会です。そのような正常な社会を存続させるには、どうしたら良いかと言いますと、人間がこれ以上やってはいけないという限界を、追求するのが倫理学ですが、それをぶちこわして進んで来たのが、日本の社会ではないかと思います。少なくとも、戦前はもっと倫理感があったと思います。次は論理的思考の欠如であります。このふたつが、現在のような社会を、つくり出してしまった原因だろうと思います。社会の仕組みを変えるということは、ものすごく大切なことです。通常このような話を致しますと、返ってくる反応は、お前の言うことは良く判る、一技術者として良く判る、しかし企業としては出来ない、組織としては出来ないと言われます。私はここに論理性の欠如を見いだします。私たちの前には断崖絶壁があり、今バスがそれに向かって、走っているわけです、こうした中で、日本の技術者が言っていることは、そのまま行くと、崖から落ちるのは判っているのに、何もしないで、目の前の生活防衛のために、一生懸命努力をしている。しかし、一生懸命努力をすればするほど、谷底を目指していることになると思います。従って我々の子孫が、明るい社会を作って行くためには、環境問題という大きな壁を越える必要があり、その壁の向こうに持続可能な社会があるのだと思います。日本はこの壁を、大変なエネルギーを使って一番高い所から、飛び越える努力をしているように思います。しかし、この壁にはいくつかの穴が開いている。スウェーデンや、ドイツはこのような穴を、通り抜けることを目指しています。一方、アメリカや日本は、この壁を飛び越えようとしているわけです。しかし、論理的に思考できる人から見れば、これは、明らかに無理だと思います。先日、ガルーダ航空が、事故を起こしました。これは通常、離陸を続ける速度に達してから、機長が離陸を断念する判断をしたようですが、環境問題についても、全く同じ状況だと思います。将来を真剣に考えたときには、このような決断をしなければ、いけないと思います。スウェーデンが、うまく出来るかどうか、判りませんが、少なくとも世界を眺めたときに、スウェーデン、デンマーク、それから最近のドイツ、オランダといった国が、本質論をずーっとやってきて、この壁を通り抜けられるのではないかと思います。

FAXED from SWEDEN No.27 1997 April

翻訳：吉川友子

社会民主労働党が大々的に失業者対策へ

社会民主労働党政府は、国の最大の経済的頭痛の種である失業者問題に取り組む手段として、660億SEK（86億$）をかけた4ヵ年計画に取りかかった。

現在、国家資金による職業や職業訓練カリキュラムを除いても、スウェーデンの失業率は8％にもなる。これを抑えるため、政府は、1998年の予備予算を大きく割いて、5つの投資プログラムに割り当てた。

すでに今年から2001年までの予定で、失業率を4.5%まで減少させるための基金として毎年約20億$が当てられている。

このうちかなりの額は、ここ数年大々的に予算を削減されていたパブリックセクターに行く。福祉サービスを改善し、これ以上人員削減の必要をなくすことによって、就業率を高めようという目的である。

また、現存する国家助成金を受けての労働市場計画も拡張され、技能レベル向上のため、高等教育分野に新しく70000の空席が設けられた。

雇用創出のため、中小企業における給与税も減らしているが、これはまだ50億SEKであり、産業が必要としている額には程遠い。若い人たちをより多く雇用するため、62歳以上の人の早期定年退職も推奨されている。

1998年度予算案を発表したエーリック・オースブリンク蔵相は、1994年に社会民主労働党が政権を取って以来、失業率を減少させる努力がことごとく失敗していると認めた。だが彼は、何年にもわたる耐乏政策と粘り強い消費切り詰めが、この失業率対策への余地を残してくれたとも云っている。

オースブリンク氏は、政府が『際限のない』失業率（国家組織のそれを除く）を、2000年までに４％に削減するという誓約に捕われてしまっているという。当時の彼の予測でも、せいぜい4.5%だろうということだった。

『我々は次第にゴールに近付いている』と、彼は云う。

国家組織も含めると失業率は13%以上であり、これは、ずっとフルな就職率を保ってきた社会民主労働党にとって、非常に高い数字である。

世論調査での評価の低下や、新しい雇用創出の失敗に対する国内批判の高まりに直面して、社民労働党は、改善に向けて強い態度に出なければならない責任の重さに耐えている。

オースブリンク氏の案は、ここ七年間で公式発表された初めての拡張予算ではあるが、予め予定されている消費制限内のことであり、つまり全体からみた財政的無駄はこれに含まれていないということになる。

彼は政府の財政報告の補足として、今年出た2.１％の予算不足は1998年には消え、以降は毎年余剰金が出て、その一部は国債の皆済に使われるだろうと強調している。

この予算案は既に中央党の同意を得ており、つまり国会の大多数の支持を得ていることになる。これによると今年の経済成長は2.1%であり、1998年は2.5%である。

労組連盟のトップがスウェーデンの欧州通貨同盟加盟に反対

スウェーデンでもっとも有力な労組同盟であるLO労働者連盟が、予定されている欧州統一通貨へのスウェーデンの加盟に対し、少なくとも今はそうするべきではないと反対を唱えている。

LO議長のベッティル・ヨーンソン氏は、欧州通貨同盟への重要な前提条件は、スウェーデンの賃金が、他の加盟国のそれよりも早く上がってはいけないということだと云っている。

スウェーデンでの賃金が他の加盟国よりも上がれば、それはスウェーデンにとって『社会的にも経済的にも大きな打撃』になると彼は云う。なぜなら、スウェーデンの競争力を削ぐことになるからだ。すべてのEMU加盟国をカバーする賃金編成メカニズムがないうちは、スウェーデンは一時的にでも加盟を見合わせるべきだと、LOは考えている。

だがヨーンソン氏は、もしスウェーデンが他のヨーロッパ諸国と同等の低いインフレーションを保つことができれば、将来的にEMUに加盟する益も、考えてみる必要はあるという。

LOの姿勢は、今年後半にはEMUへ加盟するかしないかを決めようという社民労働党の姿勢に重要な意味を果たすと思われる。

LOは社民労働党と密接な関わりを持っており、党の基金の一端を担っている。

スウェーデンをより環境にやさしい暮らしへと提唱する過激な政策

国会の環境レポートによれば、スウェーデンは今日より資源利用を20倍効率化させる計画だという。

国会の代議士委員会は、国を『持続可能な』社会に変える方法として、政府に、車のガソリン消費量を今日の0.8リットル／10kmから0.2リットルに減らす案を採用すべきだと提案した。また、新築の家に必要な暖房エネルギーが今より80%減少するよう、省エネルギーを進めるべきだとも云っている。

環境的に持続可能な社会を目指して政策を求める政府としては、この野心的な目標について真剣に検討するつもりがあるらしい。

政府はすでに原発の廃止、そしてより環境にやさしい発電への移行を公約しており、これによってスウェーデンを、他の国々が環境を考える際の手本にしようと考えている。

『持続可能な社会』レポートは、化石燃料の使用も段階的に廃止するべきだといっている。

報告会の議長である中央党の代議士レナート・ダーレウス氏は、この目標が高すぎることを認めているが、『環境法案に関して、このように広い政治的支援は滅多にない。企業も、この方向を取るだろう』とも云っている。

在日スウェーデン大使館

Japan Calendar

カイ・レイニウス　報道参事官

1998年９月号

今月20日にスウェーデンで国会、地方議会、そして市議会の総選挙が行われる。これに伴い、すべての在日スウェーデン人有権者のため、大使館内に投票所を設けており、14日までは投票が可能。詳しい日程等は、下記の項目に記述。メディア用に、本国外務省発行の選挙に関するパンフレットと信任状の申込み用紙も用意されている。スウェーデンと日本の時差の関係から大使館では伝統の“valvaka”（同日の開票速報）は行わない。その代わり、翌21日早朝、SNS（総合政策ビジネスセンター）東京支部がスウェーデンとデジタル回線で結び、開票速報を行う。ME/kr

ＭＥ：　本館
tel：　5562－5050
fax：　5562－9095
ＣＯ：　商務部
tel：　5562－5000
fax：　5562－9080
ＳＴＯ：科学技術部
tel：　5562－5030
fax：　5562－9090
home page :
http//www.
bekkoame.or.jp/
～Tokyo/
ＩＳＡ：投資部
tel：　5562－5014
fax：　5562－5130

行事予定

10月

１－６日
「にっぽん－大使たちの視線－写真展」
在日外交官によって撮られた写真展覧会が銀座プランタンにて行われる。展示される写真は、同時に阪神大震災へのチャリティー商品となる。主催はGoro International Press。大使館からは公使のBo Lundberg（ボー・ルンドベリイ）が出展する。
時間：10：00～20：00(月－土)
10：00－19：00(日)
10：00－18：00(最終日)
場所：銀座プランタン７階
写真展会場
ME/mk

５日
木村浩子展覧会
在スウェーデン20年以上になる日本人芸術家木村浩子の回顧展が大使館にて開かれる。この展覧会では、書道作品の他、油彩・水彩画も展示される予定。初日５日午後６時よりオープニングパーティーが開かれる。
時間：09：00－17：00（平日）
場所：大使館展示ホール
ME/kr

５日
スカンジナビア教会委員会会合
スカンジナビア教会委員会の定例会が大使館にて開かれる。この定例会では、秋に行われる予定のスカンジナビア教会の行事や、人員について話し合われる。
時間：12：00
場所：大使館２Ｆ会議室
ME/kr

５－17日
テレシア・ボシェレフ展覧会
スウェーデンの金工・ジュエリー作家Ms Theresia Hvorslev（テレシア・ボシェレフ）が個展を開く。
今回は特に、様々な金属を編み込んだジュエリーと金工を展示する。詳しくは03－3711－3006まで。
時間：11：00－19：00(日曜休み)
場所：荒川アトリエ・ギャラリー
ME/kr

11－19日
カイサ・ハグルンド、ヴァシリス・テオドロウ展覧会
９月の展覧会に引き続き、東京にて、Kajsa Haglumd と Vasikis Theodorou の展覧会「東京展」が開かれる。場所はプレミア・ギャラリー。
時間：12：00－19：00（最終日17：00まで）
場所：足立区西綾瀬４－３－25
プレミア・ギャラリー
tel & fax　3840－7994
ME/kr

12－18日
大使ソウルへ
クムリーン大使夫妻がソウルで行われる大使の地域会合に出席

する。
ME/kr
19日
スカンジナビアブックストアオープン
スウェーデンブックセンターが株式会社バベル、そして北欧各国の大使館の協力でスカンジナビアブックストアをオープンする。場所は、麹町にある「バベル・ハウス」。詳しくはスウェーデンブックセンターMr Olle Hedqvist0462－52－2210、もしくはバベル03－5275－2301まで
ME/kr
21－22日
第4回年次カンファレンス「輸送、交通安全及び健康」
スウェーデンのカロリンスカ研究所、WHO（世界保健機構）、そしてボルボが、日本の運輸省と運輸技術審議会と共同で第4回年次カンファレンス「輸送、交通安全及び健康」を東京の全日空ANAホテルにて開く。クムリーン大使もこれに出席する予定。
ME/kr
28日
北方圏センター20周年記念シンポジウム
札幌の北方圏センターが、同センターの20周年を記念してシンポジウムを開く。シンポジウムのタイトルは、"Perspectives of exchange among northern regions in the 21st century"。クムリーン大使がパネリストとして参加する。
ME/kr

お知らせ

異動情報

1）本館

公使のMr Lars Vargö（ラーシュ・ヴァリエー）がリトアニアの大使に任命された。後任は、Mr Karl Leifland（カール・レイフランド）。二等書記官のMr Henrik Grudemo（ヘンリック・グルデモ）の後任は、同じく二等書記官のMs Cecilia Ruthström-Ruin（セシリア・ルースストレムールイーン）。領事担当のMr Henrik Persson（ヘンリック・パーション）の後任は、Mr Rolf Salme（ロルフ・サルメ）。

2）科学技術部

科学技術参事官補のMs Tesla Halén（テスラ・ハレーン）とMr Mats Jonsson（マッツ・ヨンソン）が、一年半の契約期間を終え、8月31日に離任するのに伴い、新しくMs Åsa Ander（オーサ・アンデル）とMr Gunnar Svensson（グンナル・スヴェンソン）が参事官補として着任する。

北欧文化交流の第一世代が、ヤンソン、エレン・ケイ他との多彩な思い出を語る

バルト海のほとりの人びと

心の交流をもとめて

小野寺百合子著

武士の気配が色濃く残る明治の家庭に育った私が、結婚してから相次いで四子をもうけ、末子を生むや間もなく、地球の裏側の異文化の世界へ放り出されたのであるから、その心細さは今考えてもあわれであった。

それがけなげにも一生懸命になって対応に努力し勉強し、ついにヨーロッパ生活を身につけたばかりでなく、結構生活を楽しむまでになったのである。婚家の事情もあり、「あんまり苦労をかけたから、世界の檜舞台へ連れていってやったのだよ」と、夫は死の直前に豪語した。その意味を、それから十年経ってやっと理解するようになった。まさに私は、夫の死後十年を経て、この本世にを贈ることができるのである。

夫が現役軍人として、任地へ私を伴っていってくれた意味が初めて分かったのである。私どもが五年を暮らしたスウェーデンという国は、日本人なら誰でも国名は知っているが、スウェーデンの何を知っているかとなるとほとんど何も知らない。戦争のおかげで私どもが帰国できなかったからこそ、平常の任期を越えて五年という年月をこの国に暮らすことができたのである。スウェーデンは第一次、第二次の世界大戦を中立で通して、今世紀の世界の戦争にまき込まれなかった国柄である。この特別な思想と文化を持つ人々に、じっくりと接することができたのは幸福であった。

また、ラトビアという国は、国名さえ日本では知る人が少ない。同じ地球に住みながら、ラトビア人ほどの厳しい運命をたどった民族はいない。巡り合わせで、私はそのラトビア人とも親しく接することができた。

私は世界の数ある国々の中で、他の国のことは知らないが、夫の任地として住むことになったこの二つの国々の事情は、今日なお私の心の中の楽しい思い出として忘れることはできない。それでこの度、この楽しみを私個人が楽しむだけではなく世に表すこととなったのである。

九〇歳をすぎて著した本書は、ヤンソン（ムーミンの原作者）、リンドグレン（童話作家）、エレン・ケイ（婦人運動家）などの北欧の人々との交流を描いたものである。本書を読んで頂くことによって、北欧の文化的背景などを理解して頂ければ幸いである。

（おのでら・ゆりこ）

ISBN 4－7948－0399－0
四六上製　200頁　**1800円**
※会員には割引価格にて購入頂けます。

エレン・ケイ『児童の世紀』から100年

The 100 Years from "The Century of child" (by Ellen key)

白鷗大学教授　荒井　洌
Prof.　Kiyoshi Arai

プロローグ

スウェーデンの女性の思想家、エレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key,1849～1926）が『児童の世紀』を世に送ったのは、1900年のことである。新しい世紀、20世紀を目前にした19世紀最後の年である。その年から数えると、まもなく100年になる。エレンケイが夢を託したはずの20世紀は、残すところわずかとなった。

『児童の世紀』というタイトルは、まことにチャーミングであり、何かしらセンセイショナルである。この本の最初のページさえ目を通さなくとも、このタイトルは口にしてみたくなる。事実、子どもの福祉について云々する人の多くは、何のためらいもなく、しばしばこのタイトルを援用している。

しかしながら、である。この本のページをめくり始めると、その内容の奥の深さ、感覚の鋭敏さ、発想の意外性、辿っていく論理の難解さなどに驚きを感じてしまう。一体、彼女は、どれほどの勉強を積み重ねたのだろうと、嘆息してしまうばかりだ。

この本を、ちょっとだけでも読み解こうとしたことのある人は、『児童の世紀』というタイトルを安易には援用できなくなるはずだ。ちょうど、エレン・ケイの別の著作である『恋愛と結婚』が、タイトルのイメージとは程遠い哲学書であることを知ったときと、同じような気持ちになる。ということは、『児童の世紀』は大いに読みごたえのある、そして考えさせられる著作であることを意味している。

ところで、20世紀半ばのスウェーデンは、福祉政策の面で、ないしは福祉国家というイメージで、

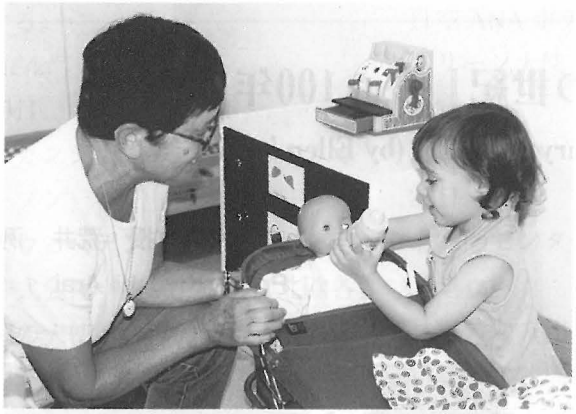
ストックホルム郊外の保育園にて（筆者）

世界の注目を浴びたホットな国であった。「ゆりかごから墓場まで」を超えているという意味で、「胎内から天国まで」というキャッチフレーズは強烈な印象を与えた。

とりわけ、「胎内から」の部分は、『児童の世紀』というタイトルとオーバーラップして、われわれの関心を引いた。すなわち、スウェーデンの母子福祉といったことがらを語ろうとするとき、どうしもエレン・ケイあたりから解き起こしてみたくなるのである。

エレン・ケイの日本への紹介は早かった。先輩諸兄姉の研究熱心と努力との賜物である。それゆえ、優れた訳書に恵まれている。したがって、学ぼうとする気持ちさえあれば、われわれは直ちにエレン・ケイに取り組むことが出来る。

『児童の世紀』出版100年を前にして、自分は無力ながら、ささやかなリポートを書いてみようと思う。乳幼児保育のことをテーマに、スウェーデンをはじめとする北欧諸国から多くのものを学ぶことが出来た経験をもとにして、このリポートを何回かにわたって書き進めていくことにしたい。


※スウェーデン・トローサ(Trosa)のフリータイムホーム(学童保育所)にて

テキストとしては、小野寺　信・百合子訳『児童の世紀』(冨山房百科文庫)を用いるが、歴史的価値のある原田　実訳や、1909年にニューヨークで出版された英訳本なども参考にしていきたいと思う。引用は、特にことわらない場合は、冨山房百科文庫によることにする。

その1　1900年・センセイショナルな発言

「子どもの親を選ぶ権利」などと言ったら、何事か！と思う方も多いのではないだろうか。これが『児童の世紀』第一部第1章のタイトルである。ちなみに、この本の献辞は「すべての親に　新しい世紀に新しい人間を創ろうと願うすべての親に捧げる」となっている。

エレン・ケイもなかなかのものだ。のっけから凡人たちを驚かす、強烈なタイトルを付けている。しかし、このタイトルは、彼女にとっては大真面目そのものなのである。

とまれ、どのような論理構成で、このパラドキシカルな感じの命題に辿り着くのだろうと、興味津々第1章を読み進むことになる。しかし、彼女はなかなか解答を示してはくれない。じっとがまんをして読み進む。

すると突然、次のような文章が登場する。

「子どもの第一の権利とみなされなければならないのは、子どもは不調和な結婚から生まれてはならないということである。まず何よりも、結婚は自由になるべきである。」

ああ、いよいよ核心に迫ってきたかな、という感じになってくる。そして、話題は具体的になってくる。

「『生命を与えられたことについて、親に感謝する』、これは古い文句である。……だが、大多数の場合、これとは逆に、親は、子どもにその現状について許しを乞わなければならない。……労働に疲れ、あるいは子沢山に打ちひしがれた母親の子どもがいる。または、恋愛なしで結婚したり、すでに愛が冷めてからの結婚で生まれた子どももいる。この子どもたちは、母親の感情の動揺のうちにみごもられ、誕生を喜んで迎えられなかった者たちである。」

この辺まで読んでくれば、もう第1章のタイトルは奇異に感じられない。エレン・ケイの思考の土台の輪郭が、おぼろげながら分かってくる。からだ。

しかし、ちょっと待てよ。20世紀が終わろうとしている現在だからこそ、まるっきり凡人の自分でさえも、どうにか彼女の思考の波長に自分を合わせることができるのだろうが、この本の執筆は1900年、日本式に言えば、明治33年のことなのだ！ヨーロッパのなかでは、いわゆる後進国、そして貧困であったスウェーデンにあっての、彼女の思索はすごい。年齢は50歳のころである。分別盛り、思索盛りの時期ということでもあろうか。

(次号に続く)

※スウェーデン・セーデルテリエ(Södertälje)の保育園にて

※写真撮影＝澤田須賀子(大阪府堺市・竹宝保育園)

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日
スウェーデン社会研究月報　平成10年9月25日発行　第1・2合併号　通算306号　毎月1回25日発行　編集責任者　岡沢憲芙　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価四〇〇円